

巻頭言 スイスへの旅で思う

名誉館長 多田 功

十数年前にジュネーブにある世界保健機関 (WHO) の委員会 (フィラリア症根絶計画) に私は通っていた時代がありました。いつも会議が終わるとヨーロッパやスイス各地を訪ねたものでした。しかし今年の夏、妻がアルプスを見たいというので、二人して気楽にユングフラウ、マターホルン、モンブランを訪ねてきました。学会発表も会議もない旅はスイスをゆっくり楽しむことができました。涼しい高原の国であるスイスは山岳と湖の景観に富み平和で美しく、見るからに観光立国という感じの国です。

他方、歴史的にスイスは山岳地帯により独立を図り、ついに 1815 年のウィーン会議で武装中立が認められた国です。このため伝統的に徴兵制を敷いており、男性はすべて一定期間の軍務が課されています。第 2 次大戦時にはヒットラーの要求を拒んでナチス軍に国土通過をさせなかったことでも有名です。いつか WHO 職員をしておられた日本人 H さん宅を訪ねたときに、スイスでは非常事態に備え常に数月分の食料貯

蓄が奨励されていると倉庫を開いて見せて貰いました。最近まで家庭には戦闘用の武器が備えられていました。ニュースで知らされたことですが、1960 年代には原爆推進計画まであったそうです。事実、新築家屋には地下核シェルター設置が必要だそうです。つまりスイスはハリネズミのような武装国家です。

しかしスイスの偉大さは科学力でしょう。スイスの化学工業力は医薬品、化学製品の分野でぬきんでており、世界的な企業や研究所がいくつもあります。この国のノーベル賞受賞者は過去 24 人を数え、うち 20 名が医学を含む理系の受賞者です。全てが純スイス人かという点では異なる人もいますが、スイスの学術レベルの傑出した高さとその国力は疑えません。さらにスイスの銀行は世界の富を集めており、驚くべき国だと言わざるを得ません。

ひるがえって日本は、国家のあり方に、安全保障にどれだけの努力が集中されているか？ 考えさせられた旅でもありました。

里山のミヤイリガイ

石井 明 (自治医科大学)

里山というのは何も手を入れない、まったくの自然とは違い人間が田んぼを作ったりしていても里山と言えるそうです。

「ホテルの舞う里山」は環境問題の話の中にしばしば出てくるイメージです。

ミヤイリガイは本来、このような里山の水辺に生息していました。それが日本住血吸虫症の中間宿主となるばかりに最近まで殺菌剤を撒かれてきました。しかし、もう今日の日本では日本住血吸虫病がなくなりましたので、時代は次の段階に入りました。

現在では、むしろミヤイリガイは保護すべき生物種であると言えます。

種は資源と言われ、南米のコスタリカでは豊かで多様な生物種を資源として保護し、

他国には出さないと方針を立てています。

「種の多様性」は、今日の世界が目指すべき方向であるとされています。絶滅危惧種が多数あると言われる今日、種の保護は人間社会の大きな課題となっています。

宮入慶之助教授が鈴木稔講師と九州、筑後川で発見したミヤイリガイは、今では筑後川に見られません。日本住血吸虫症が片山病として世界に知られる広島県神辺町の片山地方でもいなくなっています。現在は山梨県甲府盆地に残るのみかと思われます。千葉県君津のおびつ川周辺ではどうなっているのでしょうか？

いずれにせよ、日本でミヤイリガイとして知られる貝、学名 *Oncomelania hupensis*

はアジアに生息し中国、フィリッピン、インドネシア、台湾に分布していますが、それぞれ亜種であり、同一ではありません。生態も生物学的性質も異なっています。日本のミヤイリガイは *Oncomelania hupensis nosophora* として他国の種とは別で、貴重です。幸い甲府盆地では数が増えているという情報がありますが、絶滅危惧種であるとも言えます。これを保護することは種の多様性の観点から日本に課された宿題です。県や国の天然記念物に指定されれば保護が進むと期待されますが、容易ではなさそうです。

最近、社会の環境への関心が高まっています。小中高校などでは環境教育の必要性が認識されてきました。ビオトープなどを作って学習機会を増やす方向にあります。ビオトープは自然に近い里山のような生態

系・環境を作り出す試みです。ビルの屋上に作った話も聞かれます。ミヤイリガイはビオトープの中の生物として存在が可能です。他の水中生物、中でもミヤイリガイの捕食者としてのホタルとの関係は興味深く「ホタル舞う里山」から観ても検討する価値のある課題ではないでしょうか？地元の教育関係者と共にミヤイリガイを含めて環境教育の議論を進める可能性は有りでしょうか？

ミヤイリガイは病気の媒介者として広い意味で衛生動物とも言えます。このたび信州大学平林公夫教授が2012年3月に上田市で開催される日本衛生動物学会で「ミヤイリガイと住血吸虫症」をテーマに市民公開でシンポジウム企画が行われる事となりました。記念館にも関係深いテーマですので関係の方々のご参加を期待いたします。

記念館活動記録

◇ 2010（平成 22）年度特定非営利活動法人「宮入慶之助記念館」の定期総会が、去る6月4日（土）に、開催されました。（ホテルサンルート長野東口）事業報告、会計報告、新年度事業計画がほぼ原案通りに承認されました。役員改選では、鈴木政太郎理事の体調不良による辞任申し出を承認しました。「日本住血吸虫の

生活環解明 100 周年」が数年後に迫っていますが、その対応についての意見交換がおこなわれました。

◇ 第30回日本寄生虫学会が、2011（平成23）年7月16～18日にかけて慈恵会医科大学で開催され、当記念館は、展示活動を行いました。（詳細は別記）

第30回日本寄生虫学会大会展示活動報告（平成23年7月16～18日、於慈恵会医科大学）

第30回日本寄生虫学会が標記の通り開催されました。当記念館は、会場ロビーにて展示活動を行いました。展示ブース設営から当日の展示活動、撤収には、館長をはじめ延べ7名の会員の協力がありました。

注目度はそれ程ではありませんでしたが、当記念館の存在を地道に宣伝しました。

来訪者は、記念誌執筆者、記念館来館者、記念館に関係する方々などもおいでになりました。また、当日の会場で、記念館入会者、賛助会員も新規に入会いただくことが出来ました。

石井理事は、ブース紹介、入会勧誘、特に総会で2013年の記念イベントについて発言するなど精力的にご尽力頂きました。学会の太田理事長から、理事会で2013年

に学会としてイベントを開催することが決まり、とりまとめに太田先生が指名されたというお話をいただきました。

寄生虫学の最先端で活動しておられる方々から見れば、100年も前の学者のことに注目するよりは、まず自分の研究分野のことが最優先になるのが当然だと思います。そんな中でも我々に対して暖かい視線を向けていただいた方が何人もおられたことに力づけられました。記念館にとって、学会での最初の展示活動でもあり、展示ポスターの不備や事前準備の混乱もありましたが、やって良かったと思っています。活動に参加しご協力いただいた会員各位と好意的に接していただいた大会事務局はじめ学会関係の方々に心からお礼申し上げます。

倉庫を整理している中で「衛生事務誌」という雑誌が出てきました。

埃まみれで黄色く変色した雑誌の束で、廃棄処分にしようと思ひ、それでも念のためパラパラとめくってみたら記事の中に宮入慶之助の名前を発見しました。

初号、No. 1~9, 12, 16 号計 12 冊の内容は、講義が主体で諸連絡が記載されていました。講義は、衛生学、衛生行政論、飲食物試験法、細菌学、衛生統計論で、衛生学は宮入慶之助が執筆担当していました。

調べてみると、この雑誌は明治 34 年 11 月に初号が発行され、B5 版で毎月 1 回 15 日に発行、約 18 ヶ月続く予定だったようですが、明治 37 年 2 月発行の 16 号まででそれ以降については不明です。岡山大学医学部、東北大学医学部、北里大学医学部の図書館には所蔵されていますが、いずれも完全な形でそろってはいないようです。

この時期は慶之助が内務省衛生局に在勤していた頃で、「医学士 宮入慶之助」として執筆していましたが、明治 35 年 4 月にドイツへの留学を命ぜられ海外渡航の旅に出発しました。彼は、この間も執筆を続けています。

明治 35 年 3 月発行の第 4 号には「宮入慶之助君は 3 月 14 日願によりて本官並兼官を免せられ、4 月 11 日 文部省より衛生学研究のため満三年間独逸国へ留学を命ぜられ前途目出度く希望を持して 5 月 3 日の便船に搭せらるる筈、是亦彼地より寄稿せらるる

約なり」とあります。また、同年 6 月 13 日発行の第 5 号にも「(略)宮入講師は満里の航程人は起居だに懶(ものう)しとする狭き船室に在て、暑熱と波浪との襲撃を被むりつつも、是亦諸君と協会の為に執筆致居られ候(以下略)」と記載されています。

明治 35 年 11 月発行の第 8 号には、慶之助と二階堂菊太郎(保則)による「死亡統計に用いべき死因の類別に就いて」という文章が掲載されています。この内容をもとに、明治 36 年に「死亡原因類別調査報告書」が内閣統計局から臨時刊行されたものと考えられます。この当時は、病因といってもその名称は、日本古来のもの、漢方、欧米など表現方法が混乱している頃でした。そういう意味では、日本の近代衛生学における歴史の中で、病因分類について先駆的意義を持つのではないかと思います。これ以降、国内の医学的諸統計は、この分類法を指針にし、欧米との統計データの互換性も得られるようになっていきました。

同様な目的を持った全国組織で「大日本私立衛生会」が発足していた中で、この衛生事務協会発足と「衛生事務誌」という雑誌の発刊された意義、役割などまだまだ検討が必要です。引続きこの雑誌については時代的背景を含めた調査を続けたいと思っています。

あの雑然とした倉庫の中でよくも残っていたものだと感激しました。

新規会員募集

私たちは、宮入慶之助の業績を後世に伝えると共に、ミヤイリガイを駆除し日本国内を日本住血吸虫症から安全な状態に導いた先人の努力の歴史を末永く伝えることを目標に、記念館の維持・運営、資料の保存・展示・説明・調査・収集、機関紙の発行、展示会・講演会の開催などの活動をしています。

このような活動にご支援いただける会員を募集しています。

会員種別は以下の通りです。

正会員 当館の活動に参加またはご支援いただける方 年会費 3,000 円

賛助会員 当館の活動に財政的にご支援いただける方 年間 3,000 円以上のご支援

ご希望の方は、手紙・FAX・Eメール(アドレス gmiyairi@triton.ocn.ne.jp)いずれかの方法で事務局までご連絡ください。入会申込書をお送りします。

会員入会へのお礼

(順不同、敬称は省略させていただきます)

次の方々が入会されました。

濱野 真二郎、川野 和樹、太田 伸生、桐木 雅史、石渡 賢治

賛助会員入会へのお礼

(順不同、敬称は省略させていただきます)

つぎの方々から新規に申し込みをいただきました。厚くお礼申し上げます。

竹内 幹雄、澁川 美恵子、的場 武、安藤 暢彦、杉浦 伸一、村上 正高、
小澤 政敏

ご支援へのお礼

(順不同、敬称は省略させていただきます)

次の方々からご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

寄 金	清永 孝、福田 初江、濱野 真二郎、渡邊 侑、小山 政治、神山 栄治
寄 贈	松岡 裕之

宮入慶之助記念館販売品のご案内

- 住血吸虫症と宮入慶之助—ミヤイリガイ発見から90年— 宮入慶之助記念誌編纂委員会編
4,600円(送料共)
 - クリヤホルダー 販売価格3枚1セット 500円 1セット送料共660円
ご注文は、事務局 (TEL/FAX 026-293-3828) まで。
- 郵便振替口座番号 00590-6-82122 加入者名 宮入慶之助記念館

編集後記

*当館の目玉のひとつはミヤイリガイの実物標本です。宮入慶之助の業績を語るのにこのカイは欠かせません。展示室には日本住血吸虫症の研究者や臨床医の先生方のご支援により24種のカイ標本が展示されていますが、展示の迫力を増すために生きたカイを展示したいと考えています。しかし、住血吸虫症を制圧する歴史においてこのカイは危険生物として駆除の対象とされてきました。もし、当館がカイを飼育して生きたカイを展示したらどのような事態になるか、原発事故にからむ放射能についての風評被害の事例も参考に十分な分析・考察が必要であります。今号では現代におけるこのカイについての考え方について石井 明先生にご執筆いただきました。

*この度、松岡祐之先生(自治医科大学)のご尽力により、本格的な顕微鏡を3台装備することができました。

宮入慶之助の研究成果に重要な役割を果たした顕微鏡というものにもスポットを当

てた展示や日本住血吸虫とその卵、幼虫の観察展示の実現に進みたいと思います。

*藤原俊成、定家らの和歌集や歴史書、古文書などを公家屋敷とともに守り、現代に伝えてきた京都の冷泉家の財団元理事長である冷泉布美子さんが7月になくなりました。(朝日新聞による)冷泉家はどのようにして数百年の歴史を守り、継承してきたのか、我々とは比較にならないがお手本としてその歩みを学びたいものです。

宮入慶之助記念館だより 第15号
発行者

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館

編集者 宮入源太郎

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾 2322

Tel&Fax (事務局)026(293)3828

(記念館)026(293)4028

ホームページアドレス <http://www5.ocn.ne.jp/~miyaiiri/>

発行日 2011(平成23)年10月17日